



▲自然薯の収穫を体験する高知大の「えんむすび隊」の学生ら(いずれも高知県佐田町で)

# 地域を 翔る 1 大学の挑戦

## 高知大 えんむすび隊

大学生が住民たちと共に地方創生に汗を流している。教室にとどまらず、ことなく過疎化の進む地域に向き、伝統文化の継承や農林水産業の研究と育成、観光客のおもてなしに飛び回る。外から知識だけでなく、エネルギーや柔軟なアイデアも運んでくる若者たちを、住民たちは古里のためなくてはならない戦力と捉え始めた。四国の現場で、人々が将来のため、生き残りのため翔る姿をレポートする。

「この自然薯、すくく長いね」「本当や、これは高く売れるね」  
2016年12月4日、高知県東部の安田町中山地区で、高知大の教育プログラム「高知大学えんむすび隊」に参加した学生約30人と住民ら13人が協力して、畑から長さ50センチほどの自然薯約200本を掘り出した。

新しい価値掘り起こす

現場のニーズ知り深まる絆

# 縁長く 人と土地

16年度中に冊子にまとめる。「中山の人の温かさ」と食を結びつけて新しい地域の価値を作り出すのが目標だ。  
「地元の食に興味を持ってくれる」とは自分たちの自信にもつながる。地区の主婦らでつくる中山合同女性部の部長の竹内幸恵さん(60)は好意的に見守る。地域コーディネーターの赤池慎吾特任講師(37)は「『えんむすび隊』の取り組みは、地域の人々が今後もその土地に住み続けられるお手伝いになると思う」と意義を説く。

貢献活動のきっかけをつくらうと、10年度に前身となる取り組みが始まった。地域コーディネーターの教員4人が住民らと活動を企画し、全学部全学年の学生を対象に参加者を募集する。15年度は同県宿毛市や馬路村など19市町村で計28回実施され、延べ約200人が参加。現代アートの制作補助やひな祭りの準備、ツリーハウスの建築など活動は多岐にわたった。同地区での「えんむすび隊」の活動は14年3月に始まった。自然薯の栽培や販売を手伝う学生に対し、住民からは当初、「学生にとっては勉強になるだろうが、私たちにどんなプラス面があるの」と疑問の声も出た。しかし、学生が学園祭で産品を売るなど地区を熱心に宣伝してくれたことを知り、今では、学生が地区の行事に参加すると「孫が帰ってきたみたい」と喜んで迎えるようになった。

農学部4年の美馬紀子さんの(2)は14年春から計34回「えんむすび隊」に参加。住民と農業や林業を体験するうちに「第一次産業を活性化したい」と考えるようになった。4月から愛知県庁で水産専門の技術職員として働く。「地元住民から現場のニーズを直接聞くことの大切さを『えんむすび隊』で学んだ」と振り返る。

16年12月11日に中山地区で開かれた「なかやま山芋まつり」では、「えんむすび隊」の学生24人が地元の主婦らと自然薯の汁や田舎ずしなどを販売。この日は地区の人口の2倍以上の約1100人が訪れ、地区は活気に包まれた。農学部4年、田中結理さん(22)は「中山地区に行くたびに温かく受け入れてくれ、自分の家のような愛着がわいた。卒業しても山芋まつりに参加したい」と話した。地域と大学が人と人の縁を結ぶ取り組みは、これからも続いていく。

(吉田清均)

「なかやま山芋まつり」で自然薯の販売を手伝う「えんむすび隊」のメンバーら

